8

世界文学全集

レ・ミゼラブル〈3〉

ユゴー／佐藤朔訳

新潮社

世界文学全集　8

レ・ミゼラブル　Ⅲ

ヴィクトール・ユゴー

訳者　佐藤　朔

発行／1971年6月30日　　7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111　振替東京4-808　郵便番号162

印刷所／塚田印刷株式会社　製本所／神田加藤製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／中田製函株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1971

目次

第四部　プリュメ通りの牧歌とサン・ドニ通りの叙事詩（続）

第六章　プチ・ガヴローシュ

1　風の意地悪ないたずら……9
2　プチ・ガヴローシュが大ナポレオンを利用する……12
3　脱走の大詰め……35

第七章　隠語

1　起原……49
2　語根……56
3　泣く隠語と笑う隠語……65
4　二つの義務——監視と希望……69

第八章　喜びと悲しみ

1　あふれる光……74
2　完全な幸福の眩惑……80
3　影のはじまり……82
4　馬車（カブ）は、英語で走り、隠語でほえる……85
5　夜の物いろいろ……93
6　マリユスは現実にかえってコゼットに住所を知らせる……94
7　年老いた心と若い心の対面……100

第九章　かれらはどこへ行く？

1　ジャン・ヴァルジャン……113
2　マリユス……114
3　マブーフ氏……117

第十章　一八三二年六月五日

1　問題の表面……121
2　問題の本質……124
3　葬式——復活の機会……131
4　昔の激情……136
5　パリの独創性……141

第十一章　原子が大風に協力する

1　ガヴローシュの詩の起原に関するいくつかの説明。この詩にたいするアカデミー会員の影響……144
2　行進中のガヴローシュ……146
3　床屋のもっともな怒り……150
4　少年は老人に驚く……151
5　老人……153
6　新入会者……156

第十二章　コラント

1　創立以来のコラントの歴史……157
2　前祝い……163
3　グランテールに夜がおとずれかける……173
4　ユシュルー後家をなぐさめるこころみ……176
5　準備……180
6　待っているあいだ……182
7　ピエット通りで加わった男……185
8　ル・カビュックと名のる男についての数々の疑問符。ル・カビュックは偽名らしい……189

第十三章　マリユス闇にはいる

1　プリュメ通りからサン・ドニ通りへ……193
2　ふくろうの見おろしたパリ……196
3　瀬戸際……198

第十四章　絶望の偉大さ

1　旗——第一幕……204
2　旗——第二幕……207
3　ガヴローシュは、アンジョルラスの騎銃をもらっておけばよかった……210
4　火薬樽……211
5　ジャン・プルーヴェールの詩の終わり……214
6　生の苦しみのあとの死の苦しみ……216
7　ガヴローシュは巧みに距離をはかる……220

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第十五章　ロマルメ通り

1　おしゃべりの吸い取り紙……224
2　灯火を敵とする浮浪児……233
3　コゼットとトゥーサンの眠っているあいだに……237
4　度をすごしたガヴローシュの熱狂……239

第五部　ジャン・ヴァルジャン

第一章　壁にかこまれた戦争

1　フォーブール・サン・タントワーヌのカリュブディスとフォーブール・デュ・タンプルのスキュラ……245
2　深淵では話以外になにができようか？……252
3　光明と暗雲……257
4　五人減って、ひとりふえる……258
5　バリケードの上からどんな地平線が見えるか……265
6　やつれたマリユス、むだ口きかぬジャヴェール……269
7　情勢は悪化する……271
8　砲兵隊はむきになる……275
9　昔の密猟者の腕前と、一七九六年の有罪宣告に影響した百発百中の射撃を役立てること……278
10　夜明け……279
11　必中の射撃で、しかも人を殺さない……283
12　秩序の味方の無秩序……284
13　消え行く微光……287
14　アンジョルラスの恋人の名は……289
15　とび出したガヴローシュ……291
16　どのようにして兄が父となるか……294
17　「死んだ父が死期せまる息子を待つ」……302
18　禿鷹が餌食となる……304
19　ジャン・ヴァルジャンは復讐する……308
20　死者は正しく、生者も誤っていな

い……311
21 英雄たち……320
22 一歩一歩……324
23 なにも食べていないオレステースと、泥酔したピュラーデス……327
24 捕虜……330

第二章　レヴィアンのはらわた
1 海のためにやせた土地……332
2 下水道の古い歴史……336
3 ブリュヌゾー……339
4 知られていない細部……342
5 現在の進歩……346
6 これからの進歩……347

第三章　泥で、しかも魂
1 下水とその不意打ち……351
2 解釈……357
3 尾行される男……359
4 かれも十字架を負う……363
5 砂にも女のような不実な悪だくみがある……366
6 陥没孔……371
7 上陸するつもりでいるところで坐礁することもある……373
8 破りとられた上着の裾……375
9 目ききの目にもマリユスは死人と見える……380
10 命を粗末にする息子の帰宅……384
11 絶対者の動揺……386
12 祖父……388

第四章　脱線したジャヴェール

第五章　孫と祖父
1 トタン板をつけた木がふたたび登場すること……406
2 マリユスは内戦から出て家庭での戦争にそなえる……409
3 マリユス攻撃に出る……414

4 ジルノルマン嬢もフォーシュルヴァン氏がなにかを小脇にかかえてはいってきたのを悪く思わなくなる……417
5 金は公証人よりも森にあずけよ……423
6 ふたりの老人がそれぞれの仕方でコゼットが幸福になるようになんでもする……424
7 幸福にまじる幻想のはたらき……432
8 行方のわからないふたりの男……435

第六章　眠れない夜
1 一八三三年二月十六日……439
2 ジャン・ヴァルジャンは相変わらず腕をつっている……448
3 「おとも」……458
4 「不滅の心」……460

第七章　苦杯の最後の一口
1 地獄の第七界と天国の第八天……465
2 告白のなかにふくまれる暗い影……484

第八章　たそがれの薄れる光
1 下の部屋……493
2 さらに数歩後退……498
3 ふたりはプリュメ通りの庭を思い出す……501
4 引力と消滅……506

第九章　最後の闇、最後のあけぼの
1 不幸な人びとへのあわれみ、だが幸福な人びとへは寛容……508
2 油のつきたランプの最後のゆらめき……510
3 フォーシュルヴァンの荷車をもちあげた者がいまはペンも重い……512
4 ものを白くすることしかできないインクつぼ……515
5 そのうしろに夜明けがある夜……534
6 草は隠し、雨は消す……546

Les Misérables

by

Victor Hugo

レ・ミゼラブル

（Ⅲ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第四部　プリュメ通りの牧歌とサン・ドニ通りの叙事詩（続）

第六章　プチ・ガヴローシュ

1　風の意地悪ないたずら

一八二三年以後、モンフェルメイユの安料理店は左前となり、破産の深淵というほどではないが、小さな借金の下水だめに落ちこんでいった。ところでテナルディエ夫妻には、別のこどもがふたりいた。どちらも男だった。それで五人になり、女の子がふたり、男の子が三人で、子沢山だった。

テナルディエのおかみは、ふしぎな幸運にめぐまれ、ふたりの末っ子を、まだ幼いころ、ごく小さいうちに、かたづけてしまった。

かたづけるということばは、まことに適切だった。この女は性質がかたよっていた。これはよくあることだ。ラ・モット・ウーダンクール元帥夫人と同じく、テナルディエのおかみは、女の子にたいしてだけ母親だった。彼女の母性はそこでとまった。人類にたいする憎悪は、自分の息子からはじまった。息子にたいする意地悪さときたら大変なもので、彼女の心はそこに不吉な崖をかたちづくっていた。すでにご存じのとおり、彼女は長男を憎んでいたが、他のふたりの男の子も嫌っていた。なぜか？　なぜなら、そこにはもっとも恐ろしい動機、もっともはっきりした答えがあった。つまり、「うるさいこどもなんかいらない」と彼女は言っていたのである。

テナルディエ夫妻が、いかにしてふたりの末っ子を

かたづけ、それによって利益さええたか、ということを説明しよう。

ずっと前に問題になったマニョンという女は、自分のふたりのこどもを餌にして、ジルノルマン爺さんから年金をもらっていたあの女のことである。彼女はセレスタン河岸の古いプチ・ミュスク通りの角に住んでいたので、自分の悪い評判がかえって人気になっていた。世人はおぼえているだろうが、三十五年前に、クループ性喉頭炎が流行し、パリのセーヌ河ぞいの地区を悩ましたことがある。医学がそれを利用して、明礬吸入法の効果を大規模に実験した。しかし今日では、きわめて有効なヨードチンキがそれにかわって外用されることになっている。この大流行のときに、マニョンは、同じ日の朝と夕方に、まだ幼いふたりの男の子をなくした。これは打撃だった。これらのこどもは母親にとって大事な子で、毎月八十フランになっていたのである。その八十フランは、ジルノルマン氏の名前で、ロワ・ド・シシル通りの退職執達吏でバルジュ氏という年金受取人から、いつもきちんと払われていた。こどもが死ぬと、年金もなくなったわけだ。マニョンは一策を思いついた。彼女が属している悪の暗い秘密結社では、すべてを知りながら、秘密をまもり、おたがいに助けあった。マニョンにはふたりのこどもが必要だったが、テナルディエのおかみにはふたりのこどもがいた。同じように男の子で、年齢も同じだった。一方にとっては、よい整理だし、他方にとってはよい投資だった。テナルディエの息子たちがマニョンの息子になった。マニョンはセレスタン河岸を去って、クロシュペルス通りに移った。パリでは、住所が他へ変わると、人物が何者だかわからなくなる。

戸籍にのっていなかったので、文句なしに、取り替えはごく簡単におこなわれた。ただ、テナルディエの亭主が、子貸し料に、月に十フラン要求したが、マニョンはそれを承知し、支払いさえした。ジルノルマン氏が約束をまもりつづけたことは言うまでもない。かれは六カ月ごとにこどもに会いにきたが、こどもが変わっているのに気づかなかった。「だんなさま」とマニョンがかれに言った。「ふたりとも、だんなさまによく似ていますよ！」

変身がうまいテナルディエは、この機会を利用して、ジョンドレットになった。ふたりの娘とガヴローシュは、自分たちにふたりの弟がいたことにほとんど

気づくひまもなかった。貧困がある段階に達すると、一種光学的な無関心にとらえられ、他の人たちまで亡霊のように見えるものだ。しばしば、もっとも身内の者でもぼんやりした影のようになり、人生の曇った奥底にその姿がかすかに見えたかと思うと、すぐにまぎれて、見えなくなってしまう。

永久にあきらめる決心をしたものの、いざマニョンにふたりのこどもを渡してしまった日の夕方、テナルディエのおかみはすこし心配になった、いや心配になったようなふりをした。彼女は亭主に言った。

「でもこれでは、こどもを捨てるみたいだよ！」

横柄で冷淡なテナルディエはその心配をこう言ってふきとばした。

「ジャン・ジャック・ルソーはもっとうまくやったぜ！」

母親の心配は不安に変わった。

「でも、警察がうるさくないものかね？　こんなことをしても、ねえ、お前さん、いいものかね？」

テナルディエは答えた。

「なにをしたっていいやね。だれもあやしむものはいねえよ。一文なしのこどもたちのことだ、だれも目をつけようなんて、するものか」

マニョンは罪深いくせに、おしゃれなところがあった。化粧もしていた。もったいぶった貧弱な家具をそなえつけた家に、フランスに帰化した物知りのイギリスの女泥棒といっしょに住んでいた。このパリふうになりきったイギリス女は、顔がひろくて信用され、図書館の古代貨幣や、マルス嬢のダイヤモンドとも深い関係があって、のちに法廷の帳簿にものり、有名になった。「ミス嬢」と呼ばれていた。

マニョンの手に落ちたふたりのこどもは、不平を言う必要がなかった。八十フランになるので、利用されるすべてのものと同様、大事にされていた。身なりも悪くなく、食べ物も悪くなかった。「若さま」のような待遇で、実母のところにいるよりも、養母のところにいるほうがよかった。マニョンも貴婦人らしくふるまい、こどもたちの前では隠語など使わなかった。

こんなふうで数年たった。テナルディエの亭主はこれからもうまくいくと思っていた。ある日、その月の十フランをもってきたマニョンに言った、「もう〈親父〉に教育してもらわなくちゃいけねえ」

突然、ふたりのあわれなこどもは、それまで悪い運

命とはいえ、とにかく保護されていたのだが、急に世間に投げだされ、自分で人生をはじめねばならなくなった。

ジョンドレットのあばら家で起こったような悪人の一斉検挙には、必ずあとで、捜索や投獄がからんでくるもので、一般社会の陰で生きている秘密の、憎むべき反社会にとって、災難である。この種の事件は、あの暗い世界に、あらゆる種類の崩壊をひき起こす。テナルディエの破滅は、マニョンの破滅になった。

ある日、マニョンがプリュメ通りに関する手紙をエポニーヌにとどけてからまもなく、突然、クロシュペルス通りに警察の手入れがあった。ミス嬢と同じく、マニョンもつかまり、あやしまれていたその家じゅうの者が、いっせいに逮捕された。このとき、ふたりの男の子は裏庭で遊んでいて、警察の手入れに気づかなかった。家にはいろうとしたとき、戸がしまっていて、家は空になっていた。前の店の靴直しが、「かれらの母親」が残していった紙きれを渡した。この紙きれには宛名が書いてあった。ロワ・ド・シシル通り八番地、年金受取人バルジュさま。店の者はかれらに言った、「お前たちはここにいられまい。あそこへ行きな。すぐ近くだ。すぐ左にまがったところだ。この紙をもって道を聞いて行けばいい」

ふたりのこどもは出かけた。道案内になるべき紙きれを手に持って、兄が弟の手を引いていった。寒かったので、小さな指がかじかんで、紙きれをしっかりとにぎっていられなかった。クロシュペルス通りの角で、風に紙きれがふきとんでしまった。夜になっていたので、こどもは見つけることができなかった。

かれらは往来をあてもなくさまよいはじめた。

2　プチ・ガヴローシュが大ナポレオンを利用する

パリの春は、かなりしばしばするどくきびしい北風におそわれ、人びとはすっかり凍えきるほどではないが、しもやけにかかることがあった。この北風は晴れわたった日まで陰鬱にするもので、窓のすきまやよくしまらない戸口から、暖かい部屋にはいってくる冷たい風みたいである。冬の暗い扉がなかばひらいて、そこから風がはいってくるようだった。一八三二年の春は、十九世紀のヨーロッパで最初の大流行病が発生し

た時期だが、この北風が例年よりもきびしく身にしみた。冬の扉よりもずっと冷たい扉がなかばひらいたのである。それは墓穴の扉だった。それらの北風には、コレラのいぶきが感じられた。

気象学の見地からすると、寒風は強い電圧をこばまないという特質があった。稲妻と雷鳴をともなうにわか雨が、そのころよく降った。

ある晩、その北風がはげしく吹いて、また一月がもどったように思われ、市民がまた外套を着ていたとき、プチ・ガヴローシュはあいかわらずぼろをまとってふるえながら、それでも陽気で、オルム・サン・ジェルヴェー付近の床屋の店の前に立って、うっとりとしているみたいだった。どこかでひろった女物の羊毛のショールをかけ、それをマフラーのかわりにしていた。プチ・ガヴローシュは、二つのランプのあいだで、通行人に笑顔を見せながらガラスの向こうで回っている、オレンジの花を髪にかざって、首すじをあらわにした蠟でできた花嫁人形にすっかり見とれているようだった。だがじつは、ショーウィンドウの石鹸を「ちょろまかす」ことはできないものかと観察していたので、うまくいったら、町はずれの「床屋」に一スーで売りに行くつもりだった。かれはしばしばそういう一片で朝飯にありつくことがあった。かれはこの種の仕事に才能があり、そのことを「床屋のひげをそる」と言っていた。

花嫁人形をながめたり、石鹸を横目で見ながら、かれは口のなかで、こうつぶやいた。

「火曜日。火曜じゃない。火曜かな？　火曜かもしれない。そうだ火曜だ」

このひとりごとがどんな意味なのかすこしもわからなかった。もしかすると三日前の、この前食べた夕食に関係があったかもしれない。なぜなら、この日は金曜日だったから。

床屋はよく燃えたストーヴで暖められた店のなかで、お客の顔をそりながら、ときどきその敵のほうを横目でにらんでいた。そのしもやけにかかった横柄な浮浪児は、両手をポケットに入れているが、心は明らかに鞘をはらって一仕事たくらんでいるようだった。

ガヴローシュが花嫁人形や窓ガラスやウィンザー石鹸を見つめているあいだに、背丈のちがう、かなりきれいな着物を着た、かれよりも小さいふたりのこども、ひとりは七歳で、もうひとりは五歳くらいにみえ

るこどもが、ドアの把手をおずおずと回して、店にはいり、なにかたのんでいたが、たぶん施し物をくれとでもいうのだろう、懇願というよりも泣き声に似たあわれな声でつぶやいていた。ふたりでいっしょに口をきいたが、年下のほうはすすり泣きで声がとぎれ、年上のほうは寒さで歯ががたがたしているので、声が聞こえず、ことばは聞きとれなかった。床屋はおこった顔でふりむくと、かみそりを持ったままで、年上のほうを左手で押し返し、年下のほうを膝で押しながら、ふたりとも往来に追いだして、こう言いながらドアをしめた。

「つまらぬことで、人を寒がらせにきやがった！」

ふたりのこどもは泣きながら、また歩きはじめた。そのうちに雲が出てきて、雨が降りはじめた。プチ・ガヴローシュはかれらのあとを追いかけ、近づいた。

「どうしたんだ、坊やたち？」

「寝るところがわかんないんだよ」と年上のほうが答えた。

「そんなことか？」とガヴローシュは言った。「たいしたことじゃない。そんなことで泣いているのかい？赤ん坊だな！」

そして、すこしひやかすような優越感をいだきながら、あわれみ深いきびきびした、やさしくいたわるような口調で、

「お前たち、おれについてきな」

「うん」と年上のほうが言った。

そしてふたりのこどもは大司教のあとについていくように、あとにしたがった。かれらは泣きやんでいた。ガヴローシュはサン・タントワーヌ通りをバスチーユ監獄のほうへとかれらをつれていった。

歩きながらもガヴローシュは、思い出して、憤慨したまなざしを床屋のほうにむけた。

「非人情な奴だ、あの床屋め」とかれはつぶやいた。「あいつはイギリス野郎だ」

ひとりの娼婦が、ガヴローシュを先頭に三人が列をなして歩いているのを見て、大声で笑った。三人にたいして失敬な笑い方だった。

「こんちは、共同便所さん」とガヴローシュは言った。

すぐに床屋のことを思い出して、語をついだ。

「まちがっていた。あん畜生め、床屋じゃねえ、蛇だ。かつら師の奴、錠前屋を呼びにやって、あいつの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton